# 大津市神領所在瀬田廃寺造営過程の検討

小 松 葉 子

目次

１．はじめに
２．瀬田廃寺の調査と研究史
３．創建時期に関する疑義
４．瀬田廃寺出土瓦の検討
５．瀬田廃寺の竣工時期
６．瀬田廃寺は国分寺か
７．おわりに

## ― 論 文 要 旨 ―

瀬田廃寺の過去の調査で出土した軒瓦の整理から、同寺の造営過程の一端が判明した。大々的な伽藍整備は、通説どおり奈良時代中葉から後半にかけて飛雲文軒瓦が使用される。しかし、それ以前の瓦も少量ながら広範囲に分布しており、前身小堂宇が存在していた可能性を否定しきれない。着工計画は近江国府関連官衙群と並行するが、後発する単弁十二葉軒丸瓦・均整唐草文軒平瓦が出土しており、これらの瓦笵の亜種を改変製作しながら建設が続き、竣工を迎えたのは天平宝字年間であったと考えられる。全く同様の造営過程が、瀬田川西岸の国昌寺でも想定され、両岸に広がる官衙の方向軸の一致や、両寺院の整備拡張・竣工が一斉に遂行される状況、またその時期が国守藤原恵美押勝（仲麻呂）の全盛期と重なることなどから、両者における一連の流れは各々独立した事情によるものではなく、不可分の強固な連携のもとで行われ、遷都を画策する藤原恵美押勝（仲麻呂）の保良京域の荘厳が主たる建立目的であったと考える。

キーワード
格子目叩き平瓦　凹面側板圧痕付き丸瓦　変則複弁軒丸瓦　飛雲文軒瓦　国昌寺　保良京　藤原恵美押勝